

水稲 (C3型) とトウモロコシ (C4型光合成)

-地球温暖化対策?-

https://l-hospitalier.github.io

【光合成】植物の光合成は太陽エネルギーを固定する唯一の方法で、全ての生物はエネ ルギー取得をこのシステムに依存する。 光合成には明反応(light reaction) とカルビ ンとベンソンが解明した暗反応(dark reaction、右下図)があり前者が光エネルギーの 固定、後者が糖合成を担う。 明反応は光化学系 I (PSI) で 700 nm 以下の波長の光 で NADP⁺を NADPH に変換、光化学系 II (PS II) で 680 nm 以下の波長の光で H₂O か ら電子を取り去り H⁺ (と O₂) を生成、NADPH と ATP を産生する。 暗反応の収支は NADPHとATPを使って6CO₂+12NADP+18ATP→C₆H₁₂O₆H+12NADP+18ADP+18Pi。 明反応からの最終的収支は 6H₂O+6CO₂→C₀H₁₂O₀ + 6O₂。 <mark>【RuBisCo、ルビスコ】</mark>リ ブロースビスリン酸カルボキシラーゼ/オキシゲナーゼ(riburose-bisphosphonate-

carboxylase/oxygenase) は地上で最も多いタンパク質で暗反応 (カル ビン回路)の CO₂ 固定の中心。【C3 型と C4 型植物】世界 3 大穀物 はトウモロコシ、小麦、米。 この中ではトウモロコシだけが C4 植 物で他は C3 型。 イネ科植物のトウモロコシやサトウキビは、28℃ 以上の高温乾燥で効率よく CO₂を吸収、H₂O と糖を合成(低温では

C3 植物は光吸収が無い時は ATP18 分子で 6 単糖を 1 つ合成し C4 の 24 分子より効率が良い)。 1950~60年にコーチャックとカルピロフがカルピ ン回路の前段階に炭素 4 原子(C4)のオキサロ酢酸を経由する CO₂を濃縮、固 定する回路が示され、1966年に MD ハッチ (豪) と CR スラックにより詳細が明らか になった。 カルビン回路で糖合成する植物はルビスコにより 5 炭素のリブロース 1,5-ビスリン酸に CO_2 が結合して 2 分子の 3-ホスホグリセリン酸(3 炭素)になるので C3植物と呼ばれる。 C4 植物でも CO₂ 固定はカルビン回路で起きるが、前処理として柵 状葉肉細胞のホスホエノールピルビン酸 (PEP) カルボキシラーゼで CO₂を PEP に結

合して4炭素のオキサロ酢酸を合成(植物によってはリンゴ酸に変換)、維管束鞘細胞 リンゴ酸やオキサロ酢酸は維管束鞘細胞でリンゴ酸デヒドロゲナーゼに へ輸送する。

(A) C₃植物の葉の細胞配列 より CO₂を放出。 維管東鞘細胞にはルビスコ (カルビン回路) 柵状葉肉細胞はルビスコ を持ちCO2をRuBPに固 定して3PGを産生する 維管束鞘細胞は葉緑体を少数 しか持たずルビスコを持たな い。CO2を固定しない 海綿状葉肉細胞 下部表皮 (B) C4植物の葉の細胞配列 葉肉細胞はPEPカルボキシラーゼ いう酵素を持つ。この酵素は COoとPEPの反応を触媒し、4炭 素分子オキサロ酢酸を産生する 維管束鞘細胞はルビスコを持ち、 ルビスコはRuBPとオキサロ酢酸

なる

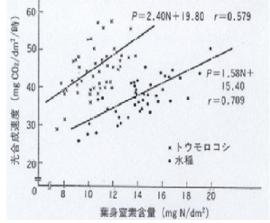
から遊離したCO2との反応を触媒

葉肉細胞と維管束鞘細胞は近くに 存在するので、CO2の葉肉細胞か ら維管束鞘細胞への移行が可能と

があり糖の合成を行う。 この前処理系により C4 植物では高 温乾燥時に気孔を閉じてもカルビン回路に持続的に CO₂を 供給できる(C4 植物は維管束鞘細胞が発達しており見た目 葉脈が太い)。 C4 植物は高温乾燥に強くトウモロコシは熱 帯、亜熱帯の主要穀物。 小麦や水稲も PEP の遺伝子コード

を持つので C4 経路の起源は古い と思われ、進化の過程での選択であ ろう*1。 右は C4/C3 の比較。 乾 燥に強いサボテンなど多肉植物で CAM 型光合成 (Crassulacean Acid Metabolism) を行う植物もある。

¹EU は 3 to 4 project で稲の C4 化を研究中。



#290